安政六未初冬

春興

美濃 巨鹿城

いとゆふに旭うつりて
霞おえく きさらぎの
春る四方の色ともに
鶯なしき鶯り

とし〳〵新式のおやもかな 耕月庵
ひも花のまつ〳〵 悠然 鶯游
年のその代を撫て昔とおもかけに 一ワ習
山ふところ緑の里は青し 象山
月をなと住ていぬ所の無とゆく 其主
様々も清ぬ鶯の寄哉 鳳村
流とも濁む池の水まつく 松亭
春さらうらうに名さへ蒲を 之友
手もとや咲るく出てしまる 桐枝
殊けやむむ子も男なり 香畫
若俵の常に喜ろつる時 竹舎
深き夜の二つ三つの衣更着 花雪
迷ふまふ恋も朝やう 石城
たりの何も手に待ちてても 二京
好も吞む酒に年の名第一 静風
賤れも出来も雲よ白妙 松園
名月の松の時匿し 法川
おもむて秋る惹の追り気 一栄
秋もまくる夕の月に待つまする汗 未醒
うつしいしをも誘る柳 軒士
行きの咲ける誘と成 一路
業さ日うけく猿子垣竈 末之
来しくも逃し花の紐を解き 可風
挑し家よ出家なる窓 里葉

右短哥行

右緑

見なれ午をと浮かり若枯梅 武門 竹舎
待しまま出るかくれて柳かな 鳳村
居もしけよひ梅さや花薹 石城
嘘くのき川松つるひ遠近か 一路
梅売や嵐も一日行きひ連 鶴風
啼く家の鶯々なと川まるか 一栄
雨の日も鶯く鳴て花盛 一ヶ雪

○

鶯の声のこ窓伝の宿への郷 一ヶ風
様くらくも鶯よ巡りや梅 梅未醒
松とその涼し梅より月の空 其主
柳らは海めく落ちや春の空 象山
春の日の庭や打つく竹の色 桐枝
春らうらに雲も春ひけて春の空 香畫
若菜や若よまた行鳥ひ猿 之友
鳥さも静なき世や松の花 松亭
雲の雲よ読ん門や月 鶴 法川
鶯や朝る風かし雲も浮し 二京
鶯の行く唄いそきの花の山 示く
下枝と花折くの梅が 軒士
打緑の年さ京まくと小松川 松園
梅咲く鶯とけの流く日が 花秀
風も春の雲ふ色く月 鶴 里支
天よや桃よや唄く山さそう 春麟

文音

枝へ先もくの見来を春のる タラ 風枝
見来れは月のかくく柳うみ 大アト 竹圃
恵の葉のおかくる月へ梅うる ダンシマ 蛻二
宰ひら川春る人の清らく空 中ジマ 翠班
流の春春くなりく菜よ今宵 ナカ 杜暁
花の宿のうや落つて雨の春 里哨

○

其さきるを和浦の泊のおうる 耕月庵
春見山よ天はるめや梅菜連

京橋江刀